地域の中学校へ進学の報に接して

重度の重複障害があり、しかもかなりの医療的ケアを必要とするお子さんの就学のことを、６年前に当 HP の「『地域の小学校へ入学』」の報（HP「雑学 BN」の福祉・教育・医療関係（Ⅱ）、2003. 3.17.：参照）」で紹介したことがあるが、お母さんからこの４月から地域の中学校へ進学することを次のようにお知らせいただいた。

【　入学後のより良い教育環境を整えるため、進学先の○○中学校や、□□小学校も加わり事前の対応を考え、合同行事や交流の場を設定してくださっています。それは私たちの意向にも沿う事柄で、新生活への不安が解消されるとともに、理解して下さる方々がいる心強さも感じています。

これまでに障がい児教育の現状には多くの改善点があることを体験しました。しかし、こうして日々熱心に取り組む方々との出会いを得ることもできました。

○○子が入学した時に６年生だった児童は現在、高校２年生になります。うれしいことに○○子を見かけると、今でも声をかけてくれるお姉さんたちもいます。彼女達の学年から現在の小学一年生までの□□小の児童を数えたら、350 人以上の学友と知り合うことができたのです。

小学校卒業を目前にした今、ご指導いただいた県や市の教育行政の方々、□□小学校で共に過ごした先生方、保護者の方々、また、今回、中学校入学に先立ちご理解いただいた○○中学校ならびに、□□小学校の両校長先生はじめ担当の先生方へありがとうの気持ちと、春からはさらに多くの学友との出会いを楽しみに、○○中学校へ進むことをお伝えしたいと思います。　】

就学前にお母さんから、「養護学校を卒業しても、同級生が会いに来てくれたり、町で見かけた時に地域の方が声をかけてくれるのでしょうか。地域の学校に通ってこそ、地域の人や同級生が声をかけてくれるのでないでしょうか。」と相談されたことを思い出す。
それだけに、地域で生きるということは、地域という場所ではなく、地域の人々との繋がりであることを、このご家族は見事に実践で示してくれたお知らせに接し、感慨深いものがある。

通学に付き添ったお母さん、それを支えたご主人やごきょうだいの労をねぎらい、何よりも○○子ちゃんに、「よく頑張ったね。中学校でもたくさんのお友だちと楽しんでね。」と声をかけてあげたい。

このご家族に、更なるエールを贈ってあげてください！

阿部幸泰　　（2009 年 3 月 14 日　記）